

さくらの会と支援センター

二〇〇三年九月二六日、二女智紗都が私たち家族の中からいなくなりました。もちろん、何もかもが初めての経験で何が何だか解らず、私としては智紗都の友達に聞いたリ、警察に行ったり、弁護士に相談する等当時、出来るだけの事は精一杯、必死にしました。私達のような遺族をサポートする被害者支援センターは同じ二〇〇三年の四月に出来たばかりで私達と接することは全くありませんでした。ただ、センターの存在を知っていたとしても支援を仰ぐ事はなかったと思います。何故なら私は父親で家族を守ることが出来るのは自分だけしかいないと思っていたからです。しかし裁判が始まれば加害者は囑託殺人だった等と自分が言いたい事を勝手に話をしました。私は拘置所に会いに行ったりして、加害者の気持ち(動機)を知ろうとしました。しかし、何の進展もなく、六回の裁判は、ただ空しく回数が重なるだけでした。

しかし判決では求刑の一六年が一五年になり、智紗都に悪い所がなくて、加害者の一方的な思いで事件は起きたと判断されて、少しは報われた様な気がしました。

私は智紗都の事を妻とずっと話していたと思っていたのですが、約半年後には「智紗都」の話はしないでほしいと妻から言われました。妻の気持ちも解りすぎる程解ります。あまりに悲しすぎて辛かったのです。私はそのような中でお酒に逃げました。しかし、お酒だけでは悲しさ、辛さをいやす事は無理でした。そして同時に智紗都の事を自由に話せる場所と相手が欲しいと思うようになりました。熊本にはその当時、ちゃんとした自助グループはありませんでした。仲間が欲しい気持ちが強くなってきた所に丁度、センターの方々から熊本の自助グループの設立に参加しませんかという誘いを受けました。私は喜んで承諾しました。

センターの方々と共に東京都民センターで数回の勉強会に参加して、自助グループやグリーフケアについて学びました。それから、数か月後、熊本で第一回目の自助グループが開かれました。私やセンターの方々が思っていた以上の集まりになりました。お互いに話をしあう事で、少しは気持ちが楽になると考えていましたが、辛さ、悲しさばかりがあふれて、救いのある会にならなかったのです。

それから、一ヵ月に一回定期的に自助グループが開かれるようになりましたが、最初の数年間は参加者が私一人だったことも多々ありました。そのような中でもセンターの方々が辛抱強く、自助グループ(私)を支えてくれました。

私自身は、当時センターの方々の事をそれほど信用していませんでした。「遺族以外に遺族の気持ちが理解できるはずがないではないか」というのが私の本音でした。

ただ良いことがしたい人たちの集まりくらいしか思っていなかったのです。しかし参加者が私だけの時は、いつの間にか本当の自分をセンターの方々の前では話せるようになっていたのです。

その中で沢山の心有る言葉をかけていただきました。自分では、どうしても答えが出なかった様なことも全く別の目線から、見る事が出来るようになりました。一年一年と回数を重ねていくことを今では感謝しています。

熊本の自助グループは都民センターのやり方では通用しないと最初の会の時からの経験から思い、だから少しずつやり方を変えていきました。センターの方々も黙って好きなようにさせて下さいました。時にはまちがいを起こしたこともありましたが、今では、それなりにうまく運営していると思っています。

本当に私達の自助グループ「さくらの会」につながって良かったと言われる方や「さくらの会」は大切な会なので身体が続く限り来たいと言われる方や「さくらの会」を卒業されていく方等、沢山の遺族の方々の為になっている自助グループだと私は思っています。

しかし、その「さくらの会」を継続していくにはセンターの人達のバックアップ無しではとても無理です。センターの方々は、一生懸命に勉強して私達遺族の気持ちを少しでも理解しようとして下さいました。いつもやさしい笑顔を絶やさずに必要な時は、その折的確なアドバイスして下さいます。

「遺族の気持ちは遺族にしか解らない」という傲慢な私の考えはまちがっていました。

大事な娘を殺されるという考えられないような事を経験した私は、当然私は当初自分が特別な存在になったという勘違いをしてしまっていたのです。

センターの方々はその様な私を理解して辛抱強くやさしく見守って下さいました。現在も「さくらの会」は遺族とセンターの方々とが一緒になってとてもうまく運営されている様に思います。それは、センターの方々の普段の努力の結果によってなされているのだと思います。

今、自分自身で悩み、苦しみを抱えている遺族の方が私達遺族やセンターとつながる事で少しでも前に進める様な会として存続していくことを願っています。